



緑の架け橋

会報第18号

2011年07月01日

植林活動で、自然環境改善と友好を育む

第15回植林緑化派遣団報告(2011年4月15日~19日)



上：石嘴山市恵農区の記念碑の前で(11・4・16)

下：中寧県第三期の植林を終えて(11・4・17)

2002年から開始された中国植林緑化活動協力事業「緑の架け橋」は、日中緑化交流基金の助成を得て、これまで寧夏回族自治区の6か所で進められてきました。

今回は、寧夏中寧県日中青年生態緑化モデル林事業の最終年度と、新規「寧夏呉忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林事業」「日中青年石嘴山市恵農区生態緑化モデル林事業」の植林活動となりました。

来年は10周年を迎えることとなります。引き続きご協力をお願いします。



プロジェクト名	事業実施期間	植林面積
寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト(済)	2002年度~2004年度	330ha
寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業(済)	2004年度~2006年度	290ha
日中青年寧夏中衛生態緑化モデル林事業(済)	2005年度~2007年度	300ha
日中青年銀川生態緑化林事業(済)	2007年度~2009年度	180ha
日中青年石嘴山生態緑化林事業(済)	2007年度~2009年度	250ha
寧夏中寧県日中青年生態緑化モデル林事業(継)	2008年度~2010年度	300ha
寧夏呉忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林事業(新)	2010年度~2012年度	210ha
日中青年石嘴山市恵農区生態緑化モデル林事業(新)	2010年度~2012年度	220ha



緑の架け橋プロジェクト

中国植林緑化活動協力事業

IFCC 国際友好文化センター

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 333 辻ビル 405 TEL. 03-3268-4387 FAX. 03-3268-6079

口座：中央労働金庫市ヶ谷支店(普)0858119 郵便：00130-9-425994

本会報は事業主催(IFCC)の植林プロジェクト特集となります

第15回植林緑化派遣団（2011年4月15日～19日）活動報告

報告：香川県職連合 森 明

日本国内では、東日本大震災による影響が様々な形であらわれる中、15回目を迎える植林緑化派遣団に5日間の日程で参加してきました。中国への出発前日、事前学習会で植林事業の全体像について学習し、この事業が大きな意味で地球環境への影響だけでなく、日中両国の友好関係の強化に大きく資するものであることを理解しました。中国本土への訪問自体が初めてということもあり、期待と若干の不安を抱えての訪問となりました。

4月15日(金) 東京⇒北京⇒銀川

羽田国際空港発の中国国際航空運行便で北京へ。当初予定では、朝の便であったものが、震災の影響による乗客減により、減便され午後の便へと変更となった。減便されたにもかかわらず、機内には空席が目立っていた。北京にて国内線への乗り換えを慌しく済ませ、夜出発の便で植林事業のベース地となる寧夏回族自治区の中心都市である銀川へ。羽田からの国際線とは違って、機内はほぼ満席状態。平日の最終便と思われるが、10%前後の高い成長率で発展を遂げている中国経済の勢いを感じた。

4月16日(土) 石嘴山市恵農区生態緑化モデル林事業・開工式



石嘴山市恵農区で一期の植林活動（11・4・16）

朝ホテルを出発し、1箇所目の植林地である恵農区での開工式へ。前日、銀川に到着したのが夜だったため、周辺の景色が全く見えていなかったが、車中から見える景色は、ほとんど緑がなく、中国の大地がむき出しになっていた。こうした自然環境の中での植林事業の困難さをあらためて考えさせられた。現地に着いてすぐ、3年計画の初年度にあたるため、開工式が地元の小学生（中学生かも）も約200人が参加する中で開催さ



3万円の震災支援金を贈与された

れ、その後植林作業を実施した。現地は、黄河がすぐ脇を流れており、水路の確保や養生作業には適した地域であると感じたが、年間降水量が非常に少ない地域であるとのことから、植林後の生育については、これまでの他の植林地同様に地元の多大な協力が必要だと感じた。また、式典に参加していた子どもたちは200人程度であったが、当日は全体でその10倍にあたる2000人の子どもたちが植林作業に従事しており、自然保護や環境教育の面からもこの事業が重要な役割を果たしているのだと認識させられた。

4月17日(日) 中寧県生態緑化モデル林事業・吳中市紅寺堡植林地・ 吳中市太陽山開発区プロジェクト生態緑化モデル林事業

二日目も好天に恵まれる中、朝ホテルを出発し、高速道路を利用し、一路中寧県の現地へ。この地区は、2008年度から事業が実施されており、今回の植林が最終年度にあっている。1日目の恵農区の現場とは違い、付近は荒涼とした砂漠地帯にしか見えない。黄河からもかなり距離が離れており、台地の上にある現場付近にはまさに草1本生えていない状況であった。3年度目にあたる植林事業の開始式が地元の小学生の参加のもと行われ、事業の最終年度にあたることから記念碑の除幕式も同時に行われた。式典に先立ってこれまでの2年度における植林実施の状況について、現地の担当者から説明が行われたが、現場の状況を見る限りにおいては、実施計画どおりに遂行されているかどうか若干疑問を抱かざるを得ないものであった。日本政府が所管する基金を活用しての日中交流事業であり、事業実施の遂行状況については、従前以上に正確な報告が求められる時代状況になっている。また、双方の信頼関係に係る問題となりうるだけに真摯な対応

を求めたいと感じた。

昼食をはさんで、午後からは 2002 年にこのプロジェクトが開始された最初に植林された呉中市紅寺堡の植林現場へその後の状況を視察へ。高速道路のインターチェンジを降りて 5 分ほどのところに現場はあり、付近はやはり砂漠地帯であった。植林されて 7~8 年が経過するとのことであったが、季節的なものなのか木はまだまだ生育途上という感であった。しかし、それまでの 2 箇所の現場と比較すれば、幹の太さや根の張り方などには力強さが見られ、荒れ果てた土地での植林



最終年度となった中寧県での植林活動 (11・4・17)

であるだけに気の長い取り組みが必要なのだと再認識をさせられた。

再度高速に乗り、3 箇所目の植林地である呉中市太陽山開発区へ移動。太陽山に近づくにつれ、道路の両側に巨大な風力発電用の風車の姿が現れ始めた。この風景は、現地までの沿線に延々と 10~20 km にわたって続いており、開発区という名前のとおり新しく都市を開発する計画に沿って建設されているものだと説明された。高速を降りてすぐのところには、太陽光発電の巨大な設備が整備されており、自然エネルギーを



太陽山開発区での一期目の植林 (11・4・17)

利用した電力供給というこれからのエネルギー政策を積極的に進める姿勢に率直に感銘を受けた。発電所視察の後、開工式の会場へ移動。

開工式の会場には、前 2 箇所のように子どもたちの元気な姿ではなく、呉中市の武装警察の若い隊員たちが 200 人ほど参加していた。少し異様な感じはしたが、新しく街づくりを進めている地域なだけに付近には、住民がほとんど生活していないため、植林の実施部隊として協力をお願いしなければならない

ののだと思う。いずれにしても、中国現地での植林事業に対する積極的な姿勢であることには間違いない。今後 3 年度をかけて、開発区への植林事業が実施されていくことになるが、同時に自然エネルギーに基づくあらたな都市開発がどのように進んでいくのか、東日本大震災による原発事故が連日報道されている日本の状況を考えると、中国のエネルギー政策を考える上でも非常に興味深く感じた。



2002 年度から開始した紅寺堡事業地を視察する (11/4/17)

4 月 18 日(月) 銀川⇒北京

寧夏回族自治区に別れを告げ、午前の便で首都北京へ。午後には、北京市内の官庁街にある中華全国青年連合会を表敬訪問。各訪問先で東日本大震災に対する義援金を頂いたことに感謝し、今は地震のために日中間の人的交流が一時的に中断しているが、今後早期に再開したい旨、相互に確認をしてきた。植林事業だけでなく、現在では日中間の交流が様々な分野で実施されてきており、長期的に見れば東アジアだけでなく、世界全体にとっても日中のパートナーシップの重要性は、高まっていくと思う。今回の派遣団に参加できたことで、その関係の醸成の一助になれたことを願いたい。

最後に

震災による影響が様々な形で現れている中、今回の派遣団の企画にあたっていただいた事務局のみなさん、そして現地での受け入れに奔走して下さった中国の仲間の皆さんに心から感謝を申し上げ、報告の結びとします。ありがとうございました。

第 15 回植林緑化派遣団参加者 (4 名)

佐藤晴男	プロジェクト代表
森 明	自治労/香川
杉山真澄	自治労/青森
鎌田篤則	IFCC 事務局長

2010年度(2010年11月~)

「中国植林緑化活動協力事業寧夏回族自治区での協力事業実施図」

